

したことにより縄文時代包含層であるV層の形成もこれらに大きく左右されたと言えよう。むろん、この考えは仮説でしかないが、今後も県内の縄文時代の遺跡でこうした点を追求するならば、さらに確かなことが言えてくるであろう。

以上、当遺跡の倒木痕についての論考を進めてきたが、最後にまとめてみよう。

- (1) 形状や埋土の状態から倒木痕と判断される。
- (2) 軽石層を鍵層とする基本土層との対比から形成時期は大半が縄文時代から古墳時代前期初頭にかけてと判断される。
- (3) 形成理由は、大半が西側に倒れていることから台風によるものと判断される。
- (4) 推論ながら集落等の人為的な台地利用を解明する上での一助になり得る。
- (5) 土層や微地形を復元する上で重要であり、縄文時代の包含層を大まかながら復元することができた。
- (6) 気候復元の一助にもなり得る。

当遺跡の倒木痕を利用して、多くの仮説を交えながら縄文時代の台地利用まで考えてみたが、そのほとんどが不明確なままで終わってしまった。これは筆者の力量不足によるものであり、調査担当者である木津博明、桜岡正信、麻生敏隆の3名による討議を基にまとめたものでありながら不十分なものになってしまったことを反省したい。

### 引用参考文献

- 能登 健 「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として」『信濃』26巻3号 275～283 1974  
石器文化談話会編 「風倒木痕とその形成要因について」『座散乱木遺跡発掘調査報告書II』 87～94 1981  
自然災害研究グループ『群大地域論集』第3号 186～195 1983  
辻本崇夫 「第5節 倒木痕の再検討」『館町遺跡』 295～306 1985

## 第2節 弥生時代

### 第1項 弥生時代の土器について

#### 1 はじめに

国分寺中間地域遺跡からは、弥生時代の遺構として住居12軒と方形周溝墓3基・埋設土器1個体・土坑3基、不明遺構1基が検出されたことは報告のとおりである。それらの遺構から出土した土器の中でその全体形状を把握できる個体はわずか4個体、口縁部や胴部など部分的に把握することのできる個体17個体をあわせても本報告中で資料化した土器総数360個体余の6%弱にすぎない。このような土器の状況や出土状態(小片が多かったり埋没土出土の土器も資料化せざるをえないような状態)等の制約条件と筆者自身がこの時代の土器に対し未熟なこともあわせると、本遺跡の土器群を詳細に分析し、様式(あるいは型式)を念頭に入れた資料提示はなしえないと考えた。そこで、ここでは、器種の識別とそれらのもつおよその特徴・傾向の抽出に努めるとともに、筆者の作業の不完全さについては現在までの研究成果に多少ふれることにより補っていきたいと思う。

#### 2 器種別の特徴について

本遺跡の土器群を器種別にみると、<sup>註1</sup>壺・甕・台付甕・高坏・甑を確認することができる。以下、器種ごとに形状、文様の特徴・傾向について記していきたい。なお、取り上げた資料には小破片が多く、各器種別の総数については今後の検討によっては、変動があることが予想される。また、明らかに同一個体と考えられる複数の破片については単体とみなして数量化している。

## (1) 壺

小破片を含め47個体が確認できた。うち器形の特徴が把握できるものは2個体であった。法量に大少があるようであるが不明確である。

器形としての特徴は、口縁部と胴部の形状に捕えることができよう。口縁部はいずれも、単純口縁であるが弧状に強く外反するものと、強く外反するが、先端が直立気味に立ち上がり、受け口状になるものがある。胴部はやや丸味をおびて張るものと、そろばん玉状になるものがある。ともに最大径は、中位近くにある。前者の中で、J 45住第348図-10は口唇部の先端が丸く、胴部は丸味をおびている。頸部には、等間隔止の簾状文が施されている。J 45住-11は10に比して、先端がわずかに内彎するものである。口縁部は無文であるが、頸部に沈線が認められる。I 74住第351図-16は、無文である。I 172住第359図-7は口縁部上半の破片で大きく外反している。これに対し、J 13住第340図-35・I 74住第351図-18・I 120住第353図-7などは、口縁部が受け口状を呈するものである。J 13住-35は、頸部に2条の沈線が認められる。I 120住-7は、破片であるが、先端に波状文が施されている。

文様は、口縁部・頸部・胴上半部に施される例が多い。口唇部および口縁部は無文のものが多かった。頸部の文様は、横走る沈線と簾状文の二種類が認められた。沈線施文の例は先述のJ 13住-35・J 45住-11の他にJ 18住第342図-16・I 212住第361図-11・I 232住第363図-31などをあげることができる。簾状文は等間隔止であるが、施文具の櫛歯の数にはバラエティーがある。

胴部は上半部に施文が集中しており、波状文、鋸歯文、縄文、羽状の直線文が個々あるいは組み合わせられて施されている。最も顕著に認められる文様はヘラ描の鋸歯文である。頸部の簾状文、波状文、横線文と組み合わせられ文様構成されている。区画内には斜めの直線文、横線文、刺突文が施されている。文様の大きさ、施文の内容にバラエティーがある。J 13住-19・J 18住-13~15などの15個体で認められている。

J 45住-2は頸部破片である。頸部の簾状文の下に波高の高い波状文が施されている。J 18住-5もJ 45住-2のように簾状文の下に2段の波状文を施し、胴部には羽状の直線文を施している。これは甕によく認められる文様構成である。

I 172住第359図-12は球形の胴上半部である。波高の高い波状文が間隔をおいて2段施されている。

I 232住第363図-16は甕の破片の可能性もあるが、頸部から胴上半部にかけて波状文が3段施されている。2・3段目の波高は高いが施文具の櫛歯は細く波も乱れている。

以上みてきたような櫛描文の他に頸部あるいは胴上半部に縄文が施される例もある。I 74住第350図-34は大型の破片である。波高の高い波状文と横線の間をRL縄文で充填している。他の土器とやや系譜の異なるものであろうか。H区1号方形周溝墓出土のものは口縁部と頸部簾状文直下の2箇所にもLR縄文が施文されている。その他にも縄文施文の例があるが小破片で器形や文様構成については不明な点が多い。

## (2) 甕

甕は口径や器高などの数値や形状の特徴を把握できるものは8個体である。法量による分類も可能と思われる。形状の特徴は口縁部・胴部に認められる。

口縁部の形状は3分類できる。緩やかに外反しながらも口唇部が内彎し、受け口状をなすもの。口縁部が強く弧状に外反するもの。直線的に立ち上がり、外反の度合いが緩やかなものである。後二者はおそらくは法量分化のあらわれとも思われるが、口縁部の長さにより2細分できる。

胴部の形状は胴上部に最大径を持ち強く張るものと最大径を胴中位に持ち丸味のあるものがある。

文様が施文される部分は口唇部、口縁部、頸部、胴上部である。口唇部は無文の他に口唇加飾を加えるも

のとして刻みの付加と縄文押圧の2つがある。口唇部の確認できたものは48個体を数え、刻み付加が7例、縄文押圧が12例あった。

口縁部は無文のもの他に波状文、縄文を施したものがある。波状文の施された例はJ 12住第338図—1をはじめ12例が認められた。特に先端に施される例が多い。J 12住—1は乱れた波状文が施されている。J 13住—2は外側がそがれた口縁部に波高の低い波状文である。J 13住—8、J 18住—24・25は波高が高い。I 172住第358図—5はやや櫛歯の太い施文具によるもので他の細い例とは様相がやや異なる。また、I 74住第350図—3は頸部簾状文の直上にあり、他の先端に施すものとやや異なる。

縄文施文の例は37例ある。I 120住第353図—6はRLを横位に、I 172住第358図—4はLRを縦位に施文している。ともに口唇部に縄文押圧がなされている。I 232住第363図—2はRLを斜位に施文している。I 172住第359図—11は壺の可能性はあるがRLで胴上半にも同じ縄文が施文されている。

頸部にはほとんどのものに簾状文が施文されている。簾状文は等間隔止で一段を施文するものが主体である。I 74住第350図—6やI 212住—1のように間隔が乱れたものもある。例外的なものとしてはJ 13住—10が一部を重ねて2段施している。I 120住第353図—4は2連止、I 232住第363図—9は多連止と考えられる。I 146住第355図—10は小破片で甕と断定しかねるが簾状文の上に円形貼付文を重ねている。

胴上部の文様構成は、胴上半部におよぶものと頸部直下に限られるものの2つがみられる。前者は頸部、簾状文の直下に波状文、その下位に羽状の直線文を配したものである。J 18住—10・12はともに小破片である。J 45住—5は2段の波状文がある。波高は著しく低く乱れている。I 120住第353図—4も2段の波状文があるがそれぞれが帯となり分かれている。

頸部の簾状文の直下に波状文を施す例は31例である。波状文は1～4段配された例が確認できた。波高と波の状態にはバラエティーが多いが波の乱れたものが多く、施文具は櫛歯の細い工具が使用されている。J 45住—3・I 74住第350図—5は比較的波高が高い。I 74住第350図—2も2段で同様である。J 12住—1は4段施され、施文範囲は胴上半部に及ぶ。波は非常に乱れている。I 74住第350図—3、I 120住第353図—1は3段配されているがそれぞれの帯が接している。

胴上部に縄文を施した例もみられる。J 13住—14は小破片で壺の可能性もあるが沈線区画内にRLを横位に施文している。I 74住第350図—6、I 172住第358図—20・第359図—11は頸部、簾状文下への施文で前者はRを、後二者はLRを横位施文していた。

小破片で不明瞭であるがI 172住第358図—35はコの子重文の可能性はある。

### (3) 台付甕

完形品の出土はない。口縁部及び脚台部破片5例が確認できた。J 18住—28、I 74住第351図—1・2、I 172住第358図—1、I 212住—13をあげることができる。I 212住—13を除いては脚台の有無は確認できず他の器種になる可能性もある。また、I 120住第353図—2・3がこの器種になる可能性がある。I 212住—13は口縁部が大きく外反し、先端が受け口状を成すものである。口縁部先端と胴部中位に粗い櫛歯による波状文、頸部に2段の簾状文が施されている。I 74住—1の胴上部に施された波状文も同様に粗い。I 172住—1は頸部の簾状文の下にLR縄文が横位に施されている。

### (4) 高坏

完形品はない。小破片を含め10例を取り上げた。J 20住—10は坏部のみであるが本遺跡では比較的残存状態が良いものである。口縁部の先端は大きく外反する。口縁部はJ 13住—24のように口唇部が波状を呈するものやI 213住—6のように小突起を有するものなどがあるようである。J 18住—4は口縁部の破片で斜めの

	壺	甕
総数	27	92
4	4	9
5	12	20
6	4	28
7	5	29
8	2	5
9	0	1

第18表 施文具  
・櫛歯数々量表

壺		甕	
左	右	左	右
1	22	26	65

第19表  
施文方向表

直線文で山形の文様を意匠している。これと同様の破片が遺構外(第379図-12)から出土している。J 45住-19、I 146住-30、I 212住-6・7は基部、脚部の破片である。

#### (5) 甕

甕はI 172住第359図-8とI 232住第365図-5の2個体である。I 172住-8は下半部の破片である。底部の中央からややずれた位置に径7mmの孔が一孔穿ってある。I 232住-5は鉢形の形状で底部中央に一孔が穿たれている。口唇部には刻みあるいは縄文押圧の加飾が施されていると思われるが不明瞭である。口縁部にはいわゆる緊縛孔と思われる2孔が認められる。

#### (6) 赤色塗彩の土器について

器面を赤色塗彩した土器は住居内から12例、遺構外から3例が出土している。塗彩の施された器種は壺、高坏である。

#### (7) 櫛描文について

各々の器種の特徴をまとめる中でも記したが、櫛描文を表現する施文具には櫛歯が粗いものと細かいものの二者があり、細かいものが多く使用されていることがわかる。第18・19表は甕の頸部に施された簾状文の施文具の櫛歯の本数と施文方向をまとめたものである。櫛歯の本数については5～7本に集中していることがわかる。施文の方向については右回りと左回りの割合が3：1となった。資料が小破片の場合、方向に逆の結果をもたらす危険性もあり、総計結果に絶対性を欠くものであるが、I 74住-3のように明らかに左回りのものも認められる。また、簾状文と波状文の施文具と施文方向における関係であるが、施文具は一個体の中では同一施文具が用いられているようである。簾状文とその直下の波状文の方向は一致している例が多いようである。

本遺跡の壺と甕の特徴について記すと次のようにまとめられる。壺は口縁部における受け口と弧状の2つの外反形態の存在、丸味があり最大径を中位近くにもつと思われる胴部、頸部文様における沈線文・簾状文の併用、胴上部にみられるヘラ描きを主とした鋸歯文などを抽出することができる。甕においては口縁部の形態、口唇加飾の存在、頸部以下の文様構成をあげることができる。また、上記の点をあげたが、本遺跡の土器群には形状、文様の施文、構成等においてバラエティー豊かである。この特色の不鮮明さが最大の特徴といえよう。

### 3 本遺跡出土の土器群の位置づけ

本遺跡出土の土器群については、前述したような形状や文様の特徴を見い出すことができる。ところで、井上唯雄・柿沼恵介の両氏は、北関東の弥生土器について通観<sup>註2</sup>し、それまでの成果を整理している。その中で中期後半に位置づけた竜見町式土器をA・B・Cの三分類、後期樽式土器をA・B・B'類の三分類し編年している。両氏の分析を参考にして本遺跡出土の土器群を見ると竜見町式のC類、樽式のA類の特徴を備えているようである。弥生中期後半から後期前半とされる土器については、両氏の検討以降もいくつかの分析・検討がおこなわれている。また、本遺跡の周辺でもこの時期の住居をはじめとした遺構が調査されている。そこでここでは、それらの成果にふれる中で本遺跡の土器群に多少の分析を試みたいと思う。これらの土器にふれる場合、学史を遡り、杉原莊介氏によって竜見町式、樽式の両型式が設定された際の主旨を理解することから始めることが正しい方法と考えるし、隣接し、密接な関係があるとされる地域、特に中部高地の研究動向についても分析する必要があることは、井上氏らの検討が中部高地の土器研究を意識しておこなわれて

いることなどをとっても、充分認めることができるがそれらにはここでは触れない。また、ここで取り上げた調査成果は前橋台地、北半の<sup>註5</sup>小地域のもののみである。

### (1) 研究小史

井上・柿沼両氏は、中期後半に<sup>註6</sup>位置づけた竜見町式C類について次のような特徴をあげている。袋口口縁の退化、口縁部の無文化、胴部文様の省略化、縄文の減少傾向、櫛歯数の若干の増加、施文調整順位の省略化、壺への櫛描文の多様化、等間隔簾状文の主流化などである。また、後期前半に位置づけた樽式A類については、竜見町式C類の様相を受けついだ点として口唇部加飾、甕における口縁端の文様化、等間隔簾状文の盛行などをあげ、新たな様相として、甕の長胴化、文様要素の櫛描文による限定化、2単位止簾状文の出現、櫛数が6～9本と増加傾向にあることなどを上げている。

外山和夫氏は『群馬県地域における弥生時代資料の集成Ⅰ』<sup>註7</sup>の中で地域ごとの土器の様相に違いが存在することを視座にすえ、原点に戻った型式設定のための作業の重要性を説いている。そして、弥生土器全般の観察を通じていくつかの提示をおこなっている。本遺跡の土器群に関係する点について記してみる。

波状文や簾状文の施文について「中期後半のいわゆる竜見町式土器(13—21)における壺の施文は左廻りの描き継ぎ施文であるが、甕(18)に見られる等間隔止の簾状文は右廻り施文である。」「簾状文・波状文等の施文は佐原真が指摘したように(註1)右廻りがほとんどである。…(後略)」と記している。

簾状文施文の櫛の止め方は「……先ず等間隔が出現し、次第に2連・3連・4連止めやそれらの入り混じったものが採用される。……」 「後期の櫛描文の施された甕は、普通頸部に簾状文が見られる。後期前半は、口縁部直下に模様があるものもあるが、口縁部から頸部にかけては模様はあまり見られない。……後期後半になると……甕および台付鉢などに見られる口縁端部が、外側に肥厚するいわゆる折り返し口縁は、この段階に出現するようである。」「いわゆる竜見町式土器には、受け口の壺が見られるがこの形はその前後もあり、かなり時間の幅をもっているようである。……」

「後期前半の甕はやや受け口状に内側に彎曲するものが特徴で……」などを上げている。

平野進一氏は、中期後半から後期にいたる櫛描文土器における形状・文様の変遷について分析をおこない、いくつかの提示をおこなっている。<sup>註8</sup>特に、本遺跡でも多く認められた壺胴部の鋸歯文と「折り返し口縁刻み手法」についてとり上げている。

細いヘラ描技法による鋸歯文は、後期前半の特色のある文様で後半には消失していると指摘している。また、その系譜については中期後半段階にみられる太描沈線のみによる鋸歯文との関連よりも中部高地、吉田式のモチーフとの共通性をみい出している。

また、いわゆる折り返し口縁の刻み目手法の認められる時間的位置づけを後期後半におこなう中で「後期初頭から後期前半の段階では中期後半と同様、平縁口縁の土器群がその主流を占め……」とそれ以前の土器の特徴について述べている。

さらに平野氏は、群馬県下の中期後半の土器を分析する中で<sup>註9</sup>竜見町式土器の成立や編年を検討、「竜見町式の古い部分」「竜見町式の新しい部分」の2つに細分を試みている。そして「新しい部分」としては浜尻Ⅱ遺跡HY—1住、雨壺遺跡67住、清里・庚申塚遺跡10住出土土器をあてている。また、「竜見町式土器の系譜上にあるものの、それに先行すると考えられる」土器群や、「系譜下にあるものの、その範疇でくれない」後出的な土器群があることも指摘している。

三宅敦気・相京建史の両氏は榛名山東南麓の後期、樽式土器を4時期細分し、各期の器種別特色・変遷を<sup>註10</sup>摘出している。この論旨を本遺跡の土器群に照しあわせて選択して記しておく。



I期の甕の特色とし、口縁部に最大径を有し、外側がそがれ受け口状を呈すること。口縁端部に刻み目を有すること。頸部の簾状文は等間隔止であることをあげている。壺では口縁の端部がそがれ薄くなること。胴部に一部鋸歯文のあることなどをあげている。そして、II期になると甕の口縁部に折り返し口縁が出現することや簾状文に二連止が出現することなどがあげられている。

(2) 国分寺中間地域遺跡周辺の遺跡出土土器について

次に周辺の遺跡から出土した土器についてふれてみたい。

前橋市清里・庚申塚遺跡<sup>註11</sup> 中期後半の環濠集落で環濠の内外あわせて25軒の住居が検出された。土器は住居に重複関係があることなども考えあわせ2～3期の時間差があることが予想されている。器種は甕、壺、鉢、高坏、蓋、台付甕、注口土器がある。壺は受け口状の口縁で胴部はいわゆる無花果状を呈し、最大径の位置が低いものである。文様の中で口縁部や胴部に施された沈線による山形文や横線からなる文様は、本遺跡では認められない文様である。また、頸部には簾状文の他に沈線文や縄文帯が認められる。

甕は、口縁部が受け口状を呈するものが主体を占め、口縁部に最大径を有するものが多い。文様では、口唇部に刻みや縄文押圧などの加飾が認められる。頸部には簾状文、まれに波状文が施され、その直下に羽状の直線文が付されたものが多い。また、コの字重文も特徴的な文様である。

高崎市浜尻II遺跡<sup>註12</sup> 住居1軒と溝1条が弥生時代中期の遺構として報告されている。

壺は口縁部が強く外反するものと、受け口になるものの2者が認められる。口唇加飾のあるものもある。頸部には沈線による文様帯が強く意識されており、沈線区画内には縄文あるいは綾杉状の文様が充填されている。櫛描文は少ない。甕は口縁部が短く強く外反する形状を呈している。口唇加飾が認められる。頸部には波状文、あるいは簾状文が施され、直下、胴上半部には羽状の直線文が施されている。

熊野堂遺跡第I地区<sup>註13</sup>「弥生時代から古墳時代移行期」の住居が18軒検出されている。報告ではこれらの住居がIII期に分けられ、それぞれI期に弥生時代後期初頭前後、II期に後期中葉前後、III期に後葉から古墳時代移行期と年代が当てられている。ここではI期の4軒についてみる。器種としては壺、甕、小形甕、小形鉢、高坏、甑がある。壺は口縁部が弧状に外反し、先端がいわゆる折り返し口縁をなすものが出土している。これは本遺跡では認められない形状である。折り返し口縁には円形貼付文や刻み手法が加えられる例もある。頸部には簾状文、直下に波状文を配し、胴上半部にはヘラ描の鋸歯文が多い。甕は口縁部先端の外側がそがれ内傾するものが多い。頸部の簾状文には2連止が認められる。

第III地区で2軒、そして近接する雨壺遺跡で検出された3軒の住居には、弥生時代中期後半から後期初頭の年代が与えられている。雨壺遺跡67号住居では壺と甕、小形台付甕が認められる。壺は無花果状の形状で頸部に沈線文が施されている。甕は強い受け口状である。文様は口唇部加飾、口縁部は沈線による山形文、胴上半から中位にかけて羽状の直線文が施されている。

高崎市元島名遺跡<sup>註15</sup> 1号住居出土の壺には、胴上部にヘラ描による鋸歯文が配されている。共伴する甕は頸部に波高が低く乱れた波状文が2段配されている。

高崎市鈴ノ宮遺跡<sup>註16</sup> 元島名遺跡に近接する。12住では壺と甕が2個体ずつ資料化されている。壺は口縁部が弧状に大きく外反するものである。無文のものは無花果状の外形ながらやや丸味をもっている。もう一個体は頸部に簾状文、その直下に波状文が配されているようである。甕は受け口状のものと直線的に立ち上がる二者である。前者は口縁部の先端と頸部簾状文の直上に波状文が、胴上位には乱れた波状文が3段施されている。後者は口唇部に刻みを施し、頸部に等間隔止簾状文、その直下に乱れた波状文2段が施されている。

上述した遺跡の他に高崎市新保遺跡、上大類北宅地遺跡、新保田中村前遺跡で中期後半の住居の検出が報告されている。また、高崎市正観寺遺跡<sup>註17</sup>、群馬町諸口古墳丘下から<sup>註18</sup>後期の住居が調査されている。

第5章 考 察

器 種		壺										甕										備 考	共 伴 器 種	
		口縁部形状		口唇部文様	頸部文様	胴上半部文様		胴部形状		口縁部形状		口唇部文様	頸部文	波状部	胴上半部文様									
		弧状に外反	受け返し	折り返し	刻み	縄文	沈線	縹状	鋸歯	その他	最大径位置	弧状に外反	受け返し	外側がそがれる	刻み	縄文	縹状	波状	その他の	波状文A	羽状文B			A+B
3住 Fig12 10住 Fig31 4 7 11住 Fig37 Fig39 12 13 14 17住 Fig58 4 5 6 Fig60 2 6 21住 Fig74	4	○				○	縹		沈	○														胴部山形・横線文   

第20表 周辺遺跡出土土器表

## (3) 周辺遺跡との比較

以上のような研究成果及び報告の資料とを考えあわせ、本遺跡出土の土器群についてふれてみたいと思う。なお、周辺遺跡の検討結果を簡易にしたものが第20表である。

本遺跡出土の壺は口縁部が受け口状になるものと弧状に大きく外反するもの2者があることを述べたが、この傾向は清里・庚申塚遺跡や浜尻Ⅱ遺跡1号住においても顕著に認められる。受け口状は雨壺遺跡67住、鈴ノ宮遺跡、元島名遺跡で出土している。本遺跡の受け口は比較的穏やかで、庚申塚遺跡21住、浜尻Ⅱ遺跡1住のように極端な形状を呈するものは無い。壺の口縁部は二者併存から弧状のものが主体となってゆくようである。折り返し口縁は熊野堂遺跡第Ⅰ地区の住居にのみ認められる。口唇部に施される刻みや縄文押圧などの加飾は庚申塚遺跡や浜尻Ⅱ遺跡でも認められる。

頸部の文様に沈線を多用する傾向は庚申塚、浜尻Ⅱ遺跡、雨壺遺跡67住にある。簾状文は鈴ノ宮遺跡や熊野堂遺跡第Ⅰ地区でみられる。

平野氏により後期前半の土器のメルクマールとされたヘラ描の鋸歯文は熊野堂遺跡第Ⅰ地区、元島名遺跡1住で出土している。熊野堂遺跡では折り返し口縁の壺に施されており、三宅氏らの指摘にも合致している。

甕は、庚申塚遺跡では受け口状と弧状に外反するものの二者があるが受け口状のものが主体である。口縁部には沈線文や縄文が施文されている。壺同様の口唇加飾は庚申塚・鈴ノ宮・浜尻Ⅱの各遺跡で認められる。

頸部の櫛描文は簾状文がどの遺跡でも共通して認められる。庚申塚遺跡と浜尻遺跡では頸部に波状文を施す例がある。上大類北宅地遺跡でも頸部に波状文を3段施すものがあるが前二者とは様相がやや異なる。波状文定着以前には頸部文様に多少のパラエティーがあったと考えられる。簾状文は等間隔止が多い。熊野堂遺跡37住の壺・甕に2連止が認められる。

胴上部の文様では、庚申塚遺跡と浜尻Ⅱ遺跡で頸部の簾状文の下に羽状の直線文が配された例がある。庚申塚遺跡では比較的多く認められる文様構成である。これに対し、本遺跡でみられた簾状文、羽状文の間に波状文を施文する例は上大類北宅地遺跡で認められる。この2つの文様構成の間にはそれぞれが主体的に施文される時期に多少の時間差があるように思われる。

平野氏や三宅・相京両氏との見解とも比較してみる。本遺跡の壺・甕は1点Ⅰ146住—3を除いて口縁部が単純口縁である。平野氏の見解に従えば、平縁で口唇加飾の施される甕は折り返し口縁のそれよりも早い段階に位置づけることができる。壺も同様とすれば本遺跡の壺は熊野堂遺跡第Ⅰ地区のそれよりも古い段階を与えることができそうである。しかし、胴上半部に鋸歯文が多様されるという共通点は両者の間が時間的に大きく掛け離れていないことを示していよう。

次に甕の口縁部について先端の外側がそがれた形状は後期の当初に認められるという三宅・相京両氏による見解である。このような形状は鈴ノ宮遺跡12住や熊野堂遺跡第Ⅰ地区で顕著である。本遺跡では客体的な形状であり、本遺跡の土器群は鈴ノ宮遺跡12住よりも前出の要素をもっていると思われる。

全体的な要素からすると壺や甕の口縁形状に受け口状のものが混在したり、壺の頸部文様に沈線文が施されたり、櫛歯の粗い櫛描文が施文されるなど清里・庚申塚遺跡や浜尻Ⅱ遺跡で認められる要素を少量ずつ残している。しかし、壺の頸部文様にみられる沈線文と櫛描文の頻度をみれば櫛描文が主体、沈線文は客体となりつつある傾向をうかがうことができる。

以上のことから本遺跡の住居出土の土器群は清里・庚申塚遺跡や浜尻Ⅱ遺跡、雨壺遺跡67住よりも後出であり、熊野堂遺跡第Ⅰ地区の諸住居よりもやや古い時期に位置づけることができよう。また、平野氏によれば元島名遺跡3号住、鈴ノ宮遺跡12住はほぼ同時期、後期前半の時期が与えられているが<sup>註19</sup> 本遺跡の土器群



はこれらよりもやや古いものと思われる。

#### 4 方形周溝墓について

本遺跡では3基の方形周溝墓が検出された。J区で1基、H区で2基である。J区のそれは出土土器にやや問題があり、必ずしも弥生時代のそれとは断定しかねる。H区の2基は周溝の四隅が分離する形状で、周溝の一部を共有するものである。方形周溝墓と住居群との平面的な位置関係は不明である。H区第1号方形周溝墓出土の土器については、本遺跡の土器を説明する中で住居群の土器とともに不明瞭な形で記述してしまった観があり、再度その特徴を記す。壺は弧状に外反し先端がやや内彎する口縁部で、胴部の中位に最大径をもつものである。頸部の簾状文や胴部の波状文は施文に乱れが生じており、住居出土の土器群よりやや後出的な要素を多く有している。

弥生時代の周溝墓は、1977年に高崎市日高遺跡で3基が検出されたのを最初に現在までに6遺跡で発見されている。中期では鈴ノ宮遺跡第8号方形周溝墓、元島名遺跡2号方形周溝墓の例がある。後期では先述の日高遺跡をはじめ高崎市上大類北宅地遺跡2号周溝墓<sup>註19</sup>、新保田中遺跡<sup>註20</sup>の周溝墓群が近接した周辺例である。

周溝墓については個々の形状、主体部等にバラエティーがあり、それらについての検討や住居群との関係<sup>註21</sup>究明等今後に残された課題が多い。

#### 5 まとめ

本遺跡の住居群から出土した土器群は従来いわれている弥生時代中期の終末から、後期初頭への過渡期のものと位置づけることができるようである。<sup>註24</sup>個々の土器についてみれば清里・庚申塚遺跡などでみられる中期後半の様相を多く残すものと、以後、後期に続く様相が混在しているようである。更にこれらに細かな検討を加えれば住居築造の序列を提示できるかもしれない。しかし、最初にも述べたようにここでの作業は各器種における形状や施文表現あるいは共伴関係について精密な時間軸を設定し検討した訳ではないし、空間軸の問題にしても便宜的に近接した遺跡を取り上げたまでのことである。今後はより正しい様式（あるいは型式）設定の為に空間軸と時間軸の検討を行う必要があるだろう。そして、様式の中の地域的な細分は農耕集落における土器の交流・発達・変遷を念頭においたものとなつてゆかなければならないと考える。また、ここでは土器の他に出土した石器類、そして住居形態等については全くふれなかった。住居の形態については平面形、柱穴、炉等の位置に弥生時代を通じて多少の変化が認められるようである。これらについての検討も今後の課題としたい。

註

註1 本来的には壺形、甕形とすべきであろう。

註2 引用・参考文献(以下文献)(1)～(3)。井上・柿沼両氏の業績は、文献(17)や文献(19)などの研究史の検討でみられるよう問題点が指摘された部分もある。

註3 杉原莊介氏による竜見町式土器の型式設定については文献(17)で平野氏が整理、記述している。

註4 中部高地の土器との関係については、杉原氏が型式設定をおこなった段階で既に認められているし、井上・柿沼両氏の検討も、中部高地の土器の動態を念頭においたものであることは文献(1)～(3)の中の分類や編年作業にうかがえる。

註5 弥生時代の集落が稲作農耕を背景に立地するとすれば小河川を単位にした遺跡群の把握が可能とも思える。そしてその中における土器の分析を基礎とした小地域圏の検討を積み上げることも土器論を深める一方法と考える。しかし、本遺跡の周辺には調査例が極めて乏しく今回とり上げた遺跡立地の範囲は地理的に近接するという便宜的なものになってしまった。また、設楽博巳氏は文献(19)で群馬県における竜見町式土器の分布及び併行関係にある土器の分布、把握の仕方についてふれている。

註6 研究小史や調査例をとりあげる中における土器に対しての年代観・型式等は、全て発表者や報告者の考えに従っている。

註7 文献(6)よりの引用。

註8 文献(4)による。

註9 文献(17)による。

註10文献(5)による。

註11文献(7)・(18)による。相京氏は文献(18)で清里・庚申塚遺跡の土器群を器種ごとの形状、文様に視点をあて細かく分析している。

註12文献(8)による。

註13文献(9)による。

註14文献(10)による。

註15文献(11)による。

註16文献(12)による。また、遺跡名については『東日本における中期後半の弥生土器』1986の中で横倉興一氏により「浜尻II遺跡」と記載されており今回はこれに従った。

註17文献(13)による。

註18文献(14)による。

註19文献(15)による。

註20文献(16)による。

註21群馬県における方形周溝墓の研究としては小島敦子氏による業績がある。氏は県下の方形周溝墓を集成し、その形状、群構成、出土土器の組成、出土状態等に分析を加え、群在性のパターン分類を試みている。『群馬県の方形周溝墓——群在のパターン分類を通して——』『荒砥北原遺跡、今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986。

註22文献(17)において平野氏は本遺跡出土の土器群の中に「竜見町土器に後出する部分」の土器があるとしている。

引用・参考文献

- (1)井上唯雄・柿沼恵介「入門講座 弥生土器——北関東2——」『考古学ジャーナル』No141 1977
- (2)井上唯雄・柿沼恵介「入門講座 弥生土器——北関東3——」『考古学ジャーナル』No143 1977
- (3)井上唯雄・柿沼恵介「入門講座 弥生土器——北関東4——」『考古学ジャーナル』No145 1978
- (4)平野進一「北関東西部における後期櫛描文土器について」『シンポジウム 弥生土器——櫛描文の系譜』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1980
- (5)三宅敦気・相京建史「樽式土器の分類——榛名山東南麓を中心として——」『シンポジウム 弥生土器——櫛描文の系譜』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1980
- (6)外山和夫他『群馬県地域における弥生時代資料の集成Ⅰ』群馬県立博物館 1978
- (7)相京建史『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- (8)中村昌人・桜井孝『浜尻遺跡』高崎市教育委員会 1981
- (9)飯塚卓二他『熊野堂遺跡(1)』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団 1984
- (10)坂井隆・飯塚卓二他『熊野堂III地区・雨壺遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (11)五十嵐至他『元島名遺跡』高崎市教育委員会 1979
- (12)飯塚恵子・田口一郎『鈴ノ宮遺跡』高崎市教育委員会 1978
- (13)飯塚恵子・久保泰博他『正観寺遺跡群(1)』高崎市教育委員会 1979
- (14)菊地健一・飯島克巳『諸口古墳調査概報』群馬町教育委員会 1984
- (15)久保泰博・渡辺義泰『上大類北宅地遺跡』高崎市教育委員会 1983
- (16)横倉興一『日高遺跡(IV)』高崎市教育委員会 1982
- (17)平野進一「竜見町式土器の分析について」『東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1986
- (18)相京建史「清里・庚申塚遺跡について」『東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1986
- (19)設楽博巳「竜見町式土器をめぐって」『東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1986

### 第3節 古墳時代（前期）

#### 第1項 古墳時代前期の住居と出土土器

古墳時代前期の住居から出土した土器群は、群馬県においては、1952年石田川<sup>註1</sup>遺跡の調査で取り上げられて以来、弥生時代後期の土器が有する伝統的な規範との断絶という地域性の追求、群馬県地域の土師器成立に最も影響を与えたと考えられる東海地方西部をはじめとした他地域との交流、前方後円墳の出現といった社会的な画期を把握するといった点で注目、かつ重要視され続けている。

遺物が出土した住居は20軒で、いずれの住居からも少量を得たのみである。資料として提示した土器も大部分が住居埋没土あるいは覆土からの出土で、床面直上から出土した資料は極めて少ない。土器個々についてみても、完形、半完形の資料は少量で器形全体を把握することは極めて困難な小破片が多数であった。

ここでは上記のような関係から型式細別を追求することは困難であるので、器種別に形態分類をおこないたいと思う。量的な問題もあり1資料1分類の観もあるが他遺跡における傾向も加味して分類に努めたつもりである。